

目次

□吾人の外面生活と内面生活(感想的論文)	千葉安良
□御伽噺	四年研究
□叙情詩としての平家物語	三年研究
□御馬の嘶	尾上先生
□和歌	
□感想「富津より」「鎌倉から箱根へ」	
□會計報告	
□文化の本質	桑木博士
□歐洲文明と個人主義	保科先生
□子馬の育て方	岡田先生

吾人の外面生活と内面生活(感想的論文)

千葉安良

1. 緒言

2. 序論 一、吾人の外面生活と内面生活とは如何なることか。
二、外面生活と内面生活との形式的方面の關係。

(以上第十四號所載)

3. 本論 一、外面生活と内面生活との實質的方面の關係。
二、外面生活及内面生活の合理的發達を圖るべきこと。

4. 結尾

本論

一、外面生活と内面生活との實質的方面の關係。

嬉しいと感じた時や好かつたと思つた時には笑ふ。悲しさや感激の情が胸に込み上げて來た時には涙が出る。これは外界或は内界の刺戟を受けて惹き起された内面生活が、それ／＼外面生活に變化を與へたものであつて、その泣いて居る時笑つて居る時は、吾人の内面生活の實質と外面生活の實質とが一致して居る時で

ある。又テニスやセンターボールなどして盛に遊んで居ると、氣も心も軽くなつて、何とも言へない快感を覺える。これは外界或は内界の刺戟に因つて惹き起された外面生活が、内面生活に變化を與へたものであつて、此の球を打つ時ボールを受ける時は、吾人の外面生活の實質と内面生活の實質とが一致して居る時である。換言すれば同一事象に向つて、吾人の内外両面の生活が傾注されて居る時である。内外両面の生活が協力して、一活動一生活を營んで居る時である。今年の夏、本校の技藝科四年の三村さんが富士山の頂上で一生の想ひ出にと大聲にて詩吟されたと言ふその時などは、此の状態の最も鮮明に表象化されて見得るものである。かう言ふ風に吾人の内外両面の生活が兩者の一致に於いて營まれて居る場合は、吾人の毎日の生活中に極めて多い事である。併し乍ら、我々の毎日の行動は決して此の両面の生活の一致に於いてのみせられて居るものではない。思つて居ることと、爲て居ることとの違ふ場合は随分ある。嬉しさを包んで澄まして居る時もあらうし、悲しさを怵へて笑つて居ることもある。痛い苦しいと感じ乍らも「大丈夫でございませぬ。何でもございませぬ。」と平氣に仕事を續けて居る人もあらうし、「あゝ氣の毒だ。」と思ひ乍らも「そんな事をしては困ります。」と叱言を言はなければならぬ時もある。此の場合には、吾人の外界或は内界の刺戟に因つて惹き起された内面生活の第一反應（此の場合には情緒）が同時に繼起した内面生活の第二反應（此の場合には知的作用と意的作用）に抑へられて、その後者の方が力強く意に作用する爲に、現はれて呉る外面生活は内面生活の第一反應とは全く異つた發相を爲して居るのである。そしてその内面生活の第一反應の方が、その第一刺戟に對する本然の反應であるが故に、内面生活の第二反應によつて現出した所の外面生活は、本當の心に裏切つたものと思はれてしまふのである。それ故、かういふ場合にはいつでも、内面生活同志の争

闘を経たのでその瞬間的の争闘に於いて、第一の自我活動即刺戟によつて惹き起された内面生活の第一反應が、第二の自我活動即刺戟によつて惹き起された内面生活の第二反應と闘つて、その第二反應の方が勝利を得て、外面生活に表はれて來る事に成るのであるが、それは極めて急速に心内に於いて行はれてしまふ故に、粗雑なる我々の反省は此の事實を見逃がしてしまつて、唯むやみに、内面生活と外面生活との實質が一致しないものときめてしまつて居るのである。殊に此の第一反應の方が吾人の生命の本然の反應であること（即天真の實相であること）と第二反應を惹き起す原因が、多く他人の意志であつたり、又は自己の精神の常相となつて居る概念系統のものであつたりするため、（そして吾人の心内にある力強い判断の命令者は外發的概念であることが多い故に、自己の體驗しない事柄が意志に作用する事が多いので）かゝる場合の外面生活は内面生活の第二反應によつて爲されたのであるにも拘はらず、その方は自分自身が爲たのではなくて、或る他人の力、他の壓迫がさうさせたことのやうに考へられてならなくなるので、そこで直ちに内面生活と外面生活との實質が違ふやうに斷定してしまふのが常である。よく考へれば前述の様に、その場合の禁止作用その他の心の働きはたとへそれが他人の命令とか、他力の制限とかから出た場合であつても、やつぱり自分の内面生活の或る點が自身にさうさせたのであるのに、それでも前の場合のやうにすら／＼と内外両面の生活の實質が一致して行かない故に、假りにこれを吾人の内外両面の生活の實質を異にする場合と名付けらる。即、吾人の内外両面の生活は茲に分離するといふ現象を呈するのである。即前の場合のやうに、内外両面の生活が唯一の同一事象に向つて傾注させられて居ないのである。相當に年のいつた生徒などが、飽き飽きした一時間の授業の終りなどに、終業の鈴の音を聞いて、嬉しいつ！と思ひ乍ら、眞顔になつてお行儀を

よくして居る時などは、單純な事柄乍ら、此の場合を鮮かに表象化して我々に知らせるものである。そして、此の内外両面の生活の實質の分離といふ事は、その一致に於いて我々の行動する事が多いと同じ様に多い者である。誰れでも自分自身に聞いて見ると、自分の内面生活の實質と外面生活の實質とが全然一致しない場合とか寧ろ全く異つて居るとか相反して居るとか言ふ事を意識する事は、する分多からうと思はれる。たゞ極く幼い子供の生活にだけにはこれがないのである。「しつけ」、「わきまへ」といふものが、抑、吾人の内外両面の生活の分離の基であるので、その幼い子供達でさへも、時には或外力のために、「心ならずも」いゝるんな事を強ひてさせられることがある。併し少くとも子供は自發的には、此の内外両面の生活の分離相反の現象を呈させるやうな事はしないのである。(私は此の兩者の分離相反を一概に悪いといふものではない人格的に道徳的に随分必要でもあるし立派でもある場合が澤山あることを認めるが、此の方面の事は、今は問題外として、茲に取り扱はずに置く。)

處で、此の兩者の相反不一致の場合の内、その不一致が非常に不快に悲しく思はれる事もあるし、又何ともない事もあるし、又時には却つて愉快に若しくはよかつたといふ様に感じられる事もある。で、それは何故かといふと、我々の感情と言ふものは、我々の生命活動のバロメーターであるからである。即ち吾人の情緒若くは情操と言ふ者は、その根本的意義として、我々の生命活動の何れか(即その時々)に於いて主として活動して居る部分)プラスに成る場合には快を感じ、その何れか(マイナスに成る場合には必ず不快を覺えるものである)ので、此の内外両面の生活の相反矛盾が、結局自分に都合のよいやうに成るために起つたものであつた時には、決して深い不満不快は感ずる事はないものである。例へば商人のお世

辭などの多くは、所謂口と心との違ふといふ類の、内外相反の好例であるが、此の場合に、その白々しいお世辭を並べて居る商人の内心に於いて、此の相反不一致を苦痛に思つて居るかと言へば、決してさうではない。即ち第一は自分の収入の利を見越す根底の心の満足が強く働いて居る故、その事柄からおこる快感は、他の小さい心内の閃きを無くさせてしまふ上に、部分的としては他人の心の裡を見極めて、對者の上手に出て悦に入つて居る心情の快感も味つて居らうし、又人間の感情の共鳴からして、お世辭を言つて相手が歡ぶと自然に自分も和らかい氣持ちになつて何となしに快を覺えるといふやうな所もあつて、ひつくるめては大きな快感をその商人は味つて居るのである。これは即ち此の心にもないお世辭は自分の利といふ事が根本になつて居るもので、斯かる種類の内外相反は普通快感を覺えるものである。そして此の様な種々の場合を具體的に考へて見て、さて之れを概括して見ると、吾人の生活の内外相反が起る場合は、利の考へからする時、自分の道念が自分の天真を抑へる時、自分に對して權力ある他人の意志が自分の天真を抑へる時、自己の理知の明瞭でないために、或は情念の強純でない爲に、習慣的に世俗的な行爲に流れ込んでしまふ時、或は反對に情念の強烈な爲に理知意志の抑へられてしまふ時などに起るものであつて、それ等の色々の場合の内、要するに自分の都合に好いからするといふ場合には、此の相反不一致が苦痛にはならずして多くは快を覺えるし、時に或は一時的に不快苦痛を覺えても割合に速かにこれを忘れてしまふか又は快感に移り行くかしてしまふものであるが、若しも自分の都合には悪いけれどもそれが義務の感に一致するといふ様な場合には、幾何かの時間の後に、幾度か内心の争闘を経た上で苦痛不快の念から離れ得るもので(普通人では)更らにそれが絶對的に自分の都合が悪くなるやうな結果の見える時だと、著しく強い苦痛若しくは不快不満が

刻みつけられて長く消えないものとなるのである。(今茲に言つた都合のよくなる悪くなるといふのは、單に有利的物質的の生活のみを意味して居るのでなくて、吾人の情意生活、即無形的精神的の生活活動をも含んでゐる。)

かういふ譯で、我々が自分の内外兩面の生活の相反不一致を意識して、それが不快感を覺えさせるといふ場合には、吾人の生命活動の何れの部分かが抑損せられて居る事を示して居るものと見る事が出来る。(尤も我々の行爲でも心理活動でも、その幾度も繰り返されたものは、準意識的作用に繰り込まれる性質傾向を有して居る故、初めは苦痛に不快に思はれた事が次第に何の顧慮も拂はれないやうになつてしまふ場合も随分多い事も注意せねばならぬが)そして、かう言ふ状態は必然的にそのまゝで永續し得ない筈のものであり、又永續させては悪いこと(不合理なといふ意味)なのである。所が、前に言つたやうに、此の不一致相反は、畢竟するに、吾人の内面生活同志の争闘の結果である故に、今一步突き進んで考へて見ると、此の不合理は、内面生活それ自身が惹き起すものであつて、吾人の内面生活に於ける、知と知との争、知と情との争(情と知との争)知と意との争(意と知との争)情と情との争、情と意との争(意と情との争)意と意との争等の結果であると言ふ事になる。それで、我々は若しも此の不合理から逃れ度いと思つたならば、自分自身を、此の自らの内面生活同志の争から瞬間的に正當に脱出することの出来るやうに鍛鍊すればよいのであるといふ事に歸著する。

以上は、吾人の内外兩面の生活の實質の一致する場合と、一致しない場合とのあることを示し、その不一致の場合の結果を述べ、その不一致の不合理から逃るゝ方法を考へたのであるが、それは此の内外兩面の生

活の個々の場合、表象的の場合に就いて言つたものである。所が既に序論に於いて述べたやうに、吾人の内面生活、外面生活の交渉は、唯瞬間的にその兩面の個々の生活形式が現はれて來るだけのものではなくて、外面生活には外面生活の系列があり、内面生活には内面生活の系列があるのであつて、吾人はお互同志それを意識的無意識的に認識して居るのであつて、ちやんとそれに命名までして居る。例へば毎日「子守」ばかりして居ますとか、相變らずの「教員生活」を送つて居りますとか、いふのは、即ち、此の外面生活の系列の認識を言ひ表はして居るものであり、又彼の人は「理想家」だとか、「趣味の高い人」だとか、「詩的」な生涯とか「哲學的」な人間だとかといふやうなのはその内面生活の系列の認識を言ひ表はしたものであり、又「服従的生活」とか「放縱な日暮し」とか言ふやうなのや、「無邪氣な人」とか「因循な人」とか言ふのは、内外兩面の生活の關係的方面の系列を認識しての語である。そして、此の系列、即ち日常生活の總和通觀から見て、その内外兩面の交渉の誠に具合よく行つて居る人と、具合よく行つて居ない人とのある事を見出すのである。即ち子守の生活を爲ながら詩的生涯を送つて居て少しも不調和を來し苦痛を感じるやうな事なしに濟んで行く人もあらうし、教員生活と哲學的思索との間に非常な矛盾を感じて苦んで居るといふやうな人も出來て居るといふ譯になる。更らに舊道徳舊思想の横行濶歩する現代において、新道徳新思想を抱けるが爲に非常な苦惱を味はねばならぬといふ事にもなるのである。

扱て、此の様に吾人の内面生活の系列と外面生活の系列とが非常な懸隔を來すといふ事になつて來ると、(事實上、相反の不合理がその儘進行し續けて居てかうなる。)その結果はどうなるであらうか。元來、吾人の内面生活は、素直に外面に現はれて行くのが本然の姿なのである。それで内外兩面の生活の系列の、非常

な懸隔不一致といふ事は、抑、反自然の現象なのであつて、その儘に故障なしにすんでしまふべき筈のものでないのである。即ち、その内面生活の天真の所、前述の第一反應の眞といふものは、その儘の姿で、何時かは外面生活の上に表はれねば止まないといふ強い要求となつて来る。「忍ふれど色に出にけり」といふのもこれである。「筆執りて物を思へばあやしくも、心に似たる事を書かるゝ」といふのもこれである。「思ふ念力岩をも透す」といふのもこれである。「精神一到何事不成」といふのも、イデーフォーオスの學説も、皆これである。即ち吾人の意識の表現性は決してこのやうな場合にも泯滅してしまはないのである。詩歌はかくして生じ劇も小説も斯くして成るのであると言ひ得る。昔から「小言八百愚痴千粒」といつて、とかく人は愚痴を言ひたがるものであるのも此の爲であるし、「口さがなきは女の常」と言つて女子と多辯とが附き物のやうに思はれる様な現象を呈して居るのも此の爲である。更らに又「歎きごと」を言ふことを「うとむべきもの」の第一に數へられた樂翁公でさへも、やつぱり折に觸れ事に付けての感興は口の上ばせ筆に托さずには居られないで、彼の花月草紙六巻を書かれたのである。バーナードショウが「能ふ者は爲す。能はぬ者は教ふ。」といつた意味深き語もやがては此の消息を語つて居る者である。そして若しも口も筆も短にして、自ら内面の鬱勃たる感懷を表現し得ない場合には、それを他人が言ひ或は行つて呉れたのを見或は聞いて、消極的にその他人の言行或は製作物等の上に、自己を投影して、少からぬ慰藉を感ずるといふ事になるのである。御許しを願つて言はせて頂かうならば、尾上先生の「我が如き想ひを誰れのする者ぞ、悲しや心神も知らじな」のお歌などを拜見すると、私共には涙の出る程嬉しい慰藉を感ずるのなどは全く此の爲であらうと思はれる。

此の様に吾人の内面生活の眞は次第次第に外面生活の上に現はれて来る性質の者であると同時に、(即ち

趣味性の強い人の生活は自然に趣味的生活となるやうに) 又所謂「形よく心に及ぼす」とか「居は氣を移す」とか「去る者は日々にうとし。」とか言ふ様に、吾人の内面生活は不知不識の裡に其の外面生活から影響され形成せられて行く者で、「商人根性」とか「學者固氣」とか言ふものゝ生じるのは此の爲である。

此の様に吾人の内外両面の生活の實質は互に相關的關係に於いて相交渉して居るのであつて、その兩者の間に於ける、一致の多い人も、不一致の多い人もあるのであるが、人間がお互に各自の考へや意志や感情が違ふ以上、又各自自身にも二つ以上の矛盾的要求の有る以上、此の兩者の不一致の全くないなどといふ事は有り得ない事で、孔子でさへも「心の欲す所に従つて短を越えず」といふ佳境に入られたのは齡七十を重ねられてからであつたし、畏くも一天萬乗の君と仰がれた白河法皇にさへも三不如意の御歎きがあつたのである。

二、外面生活及内面生活の合理的發達を圖るべきこと。

前章に述べた如く、吾人の内面生活と外面生活とは、互に相關的關係に於いて相交渉して居るものである故、原則としては、内面生活の整頓して居る人の外面生活は自然整頓したものとなり、内面生活の多角多面な人の外面生活は自然多角多面のものとなる筈であり、同様に外面生活の複雑な人はその内面生活の斷面も多面複雑であり、その單純な人は、自然の状態としては内面生活も單純に濟んで行く筈なのである。併し乍ら之等と全く相反した事實を見る事もある。そして其の意識され方には種々の別があるであらうが、とにかく、我々は其の生活形式として、内外兩様の生活を持つて居るのである以上、我々はその何れをも自分の生活として發達進歩させて行くべきであり、同時にその兩面の關係も出来るだけ調和的に行くやうに導くべ

きである。合理的發達と頭書に特に標榜した所以は、此の兩面の關係の調和的に行くやうにどの意味からである。(此に言ふ進歩發達とは吾人の個人性も社會性も満足させ乍ら、より多く自分の資性を展ばし自己の有する生命力の發現を敬虔に企圖して、生命の神性(といふ語で代表させておく吾人の生命力のx)を表現し得る生活に一步一步と近寄ることである。)

具體的にどうすれば、吾人の内外兩面の生活を發達させその兩者の關係を調和的ならしめ得るかといふ事になると、それは如何様にも考へ得るし言ひ得ることではあるが、先づさしあたり内面生活を豊富ならしめるためには讀書する。あらゆる科學の分野に向つてこれを讀解する意氣を以て突進する。外國語のも讀むやうにする。詩を讀み劇を見、活眼をひらいて實人生の實相を把握するやうに心掛ける、更らに大自然に親しんでその悠揚澄澈の象を體得する。立派な人格の人に接して人格と人格との力で磨き合ふ。思へば如何に吾人の日常の人と人との交りの皮相の處に動いて居ることよ。己れを空しうして直ちに大自然の心腸に涵り入るを得ると同じ様に、吾人が天真の至純さを以て他人に接する時、人は如何に美しくその脾肝心肉の尊さを示現して呉れることよ。かうして我々は動かすべからざる心證によつて、確實なる内面生活を展開して行くべきである。「祈り」の力は、あらゆる至醇なる心を有する人の知り得る境地である。そして吾人の内面生活中に、無限に廣大な絶對境が開展するのである。豊富潤澤な内面生活は自然吾人の外面生活を向上させるものであることは前述の兩者の關係からたやすく肯定せられよう。更に又吾人はその外面生活を整頓せねばならぬ。言ふべくして十分に行はれ悪い事乍ら、覺悟としては誰れしも次の様に心がけたいと思ふであらう。即ち自分に與へられた仕事(與へられたといふのは、自らとつたものも、境遇が取らせたものもあるが、大

宇宙から見れば、吾々は與へられたと言ふ語を用ひずには居られない。」をよくさばいて行く事。自分の生活のためをはかるべきこと。(此の事は先天的によく出来て居る人と、先天的にかうできにくく生れついて居る人とあるらしいので、わざとかく記した。)などが主な事である。(忠君愛國孝義などに就いては、お互に堅い決心と理解とを有する事故茲にくだしく述べる必要を認めないので略く。つい先頃も 皇后宮の尊き御影を賤の身の目のあたりに拜しまつて、心からの涙に咽んで無言の忠誠を誓つたお互である故)かうして吾人の相對的生活の榮えを持ち來たすものは、吾人の外面生活のさばき方である。そして自己と周圍とに對して至純なる心情と聰明なる理知とを鋭く働かせ乍ら、内外兩面の生活の一致をより多く現出し得るやうに行けばよい。徒らに聲を大きくして言ふことよと笑はないでいたゞきたい。我々はなほ青年の意氣を失はぬ者である。

結 尾

現代人の生活には内外兩面の生活の相反が多い。そしてそれは苦痛と悲哀との感を伴ふものであり、同時に大勇猛心を起させて居るものである。此の苦痛と悲哀と勇猛心を抱いて居るのは殊に青年壯年の人に多い。それは現代人の内面生活の表白であり同時に外面生活の描寫である所の現代の文藝によつて明かに示されて居る事である。若い人同志の集つた時の話でもわかる。眞實性に富んだ現代人の容貌がそれを表示しても居る。一面から見て、何時の時代だとして過渡の時代でない時期はなく、且又吾々の苦悶を過渡時代の苦悶として説く事も何だかあまり古めかしいやうにも思はれる。併し乍ら何と言つても、吾々の受けて居る苦悶と我々の感じて居る雄飛心とは過渡時代の賜物であり新舊思想の争闘からの所産である。獨り我が日本に

於いて許りかうなのでは無いらしい。十九世紀の後半以來歐米の天地を揺り動かして居る大動搖も同一根元にあるのである。否、人類の生活様式が更らに一大進展を見んが爲の大動搖の大震源は早く既に歐洲の天地に生じて、それが我が國にも及んで来て、丁度明治の御一新以來の國內生活の變轉と相錯して、舊來の吾人の生活の大きな欠陥をより強く見せ、動搖をより根底的ならしめて居るのであるらしい。游動圓木にでさへ大ゆれの上を渡る時の眞劍さは一通りでないだけにその快感も亦普通のゆれの上を安々と渡るのとは比べものにならないほど深い。まして一生一度の人生に於ける尊き人間生活の根本的動搖に逢遭して居る我等は假令誰れが何といはうとも眞劍にならざるを得ない次第で、現代の人は各人の天資相應に皆眞劍になつて居るのである。そしてその大動搖を惹き起した根本精神である所の「眞の内にあらゆる美と善とを見る」といふ思想に立脚してかなり大膽に新生活に突入しつゝあるのである。そしてかなり鮮明に科學的研究科學的思索と宗教的靜觀との門から清朗な絶對境を示現し合つて居るのである。そして今日にも早や幾分づゝか吾人の肩から外面生活の壓迫を減じつゝあるやうになつて來たらしくも見える。しかしそれは小さく速く平和に落ちつかうが爲ではない。眞生涯に十分活きんが爲めの吾人の努力が千萬分の一の奏功を見せて來たに過ぎないので、安心し切つてしまへばすぐに時代の犠牲として暗きに落されてしまふ。

私が此の感想的論文の稿を起した今年の春頃は、私自らは自身の内外兩面の生活の相反矛盾からの苦しみを大變に感じて居た極點から、初めてその解決の第一歩をふみ出した頃であつたが、それから想ひを潜むること半歳餘の今日、此の一篇を稿する今は、此の問題に就いては自分としては明瞭な解決に到達し得た歡喜を抱いて居る。澤山の疑問や苦惱がぼつん／＼と一つづゝ減じて行く喜悅、人よはりさうした悦びを他

人に願ちたいものなのである。一切の價値の轉倒を稱へ、自己の進展を叫んで當代の獨逸のあらゆる道徳を罵つたフリードリッヒニイテエが、「此の人を見よ」において如何に熱心に後人にその踏むべき道を示したかを見出した時、私は人間の神性の尊さに泣かざるを得なかつた。そして私は茲に再びシヨウの意味深き語を繰り返したい。「能ふ者は爲す。能はぬ者は教ふ。」と。

個々の情緒的經驗が繰り返されて、情操的系列となるやうに、我々は悟りと迷ひとを繰り返して行く内に、その迷ひの雲を晴らしては悟りの清朗さから絶對境を垣間見つゝ、それを積みに積んで遂に常住安樂の眞天地に呼吸し得るに至り、そこに初めて有待絶待相對絶對の兩界に融會し自在なるを得るに至らう。そしてそれこそは吾人の内外兩面の生活の眞の調和に到達した象である。(完) (大正五、一一、一九稿了)